

第二部 パネル・ディスカッション

モデレーター：島 多代氏

パネリスト：リーナ・マイセン氏 エイダン・チェンバース氏 ジェイ・ヒール氏
司 会：富田美樹子国際こども図書館長

富田館長：それでは、ただ今より第二部を始めます。

第二部は、島多代さんにモデレーターをお願いしまして、パネル・ディスカッションを行います。ここで島さんについて、ご紹介させていただきます。

それではここで、バトンを島さんにお渡しいたします。

島氏：これから第一部で皆さまに話していただいたことを含めて、国際アンデルセン賞の軌跡について、皆さまとお話をかわしていきたいと思えます。

私が IBBY の会長を務めております間に、国際アンデルセン賞というものがどのように運営されているのか、ということを見てこれは大変なことだと思えました。それは、どうということかと申しますと、一つの組織が動いているのですが、それに関わる世界中の人たちが、個人的な尽力を惜しまなかった。そしてそれには、彼らが持っている情熱が関わっていて、それなしでは決してできないような、重要な仕事に貢献していただいていたわけです。それが 50 年続いて、マイセン氏が先ほど審査の過程の重要さやその方法があまり変化がなかった、ということをお知らせしました。これは私たちの今の社会が持つ明るい見通しの一つだと思えます。社会の中の組織や全体のあり方が、本当に個人の情熱と貢献を活かすことができれば、私たちはおそろくいい人間の社会を持つことができるのではないかと、そういう風に楽観的に見れば思うことができる、それが国際アンデルセン賞の軌跡だと思えます。

運営については、マイセン氏が、過去 30 年間関わられていました。一人の人間が運営し続けてくださった、ということが一つの大きな要素だと思えます。そしてジェイ氏から、審査委員の人たちが担ってきた役割の重さについて、光が当たらないながらも、その経験が彼らに素晴らしい褒美を与えたと言われました。皆さんもそう考えてくださっているから成り立つのですが、そういうことを自分たちの誇りとできる人たちが IBBY が持っているということが、本当に幸せだと思えます。

そして結局は、その全業績によって賞を受けたチェンバースさんの先ほどのお話で、皆さまおわかりになったと思いますが、ああいう形で本を書くことがそんなにたやすいことではありません。社会と対峙して自分の与えられた一つの「書く」という仕事を純粹に追及する、例えば 10 年もかかるそのような仕事をしていても、社会がそのまま待っていて受け入れるとは限らない。先ほどのマイセン氏のお話にもありましたように、たくさんの方が自国よりも他の国で評価されていることも国際アンデルセン賞は記録しています。

私たちがこの国際アンデルセン賞の審査過程の情報を知ることになったきっかけは、1992 年と 1994 年の審査に日本から松岡亨子さん（注：現東京子ども図書館理事長）が初めて参加されたことでした。彼女の『こどもとしゃかん』（53 号：1992・春～56 号：1993・冬）における報告がありますが、それに今日のマイセン氏やジェイ氏のお話の裏付けが、一人の審査委員としてはっきりと記されていると思えますので、皆さんもそれを読み返していただけたら幸いです。

レップマンが国際アンデルセン賞を考えたもとには、ベルリンの戦火の後の子どもたちの生き残りをかけた状況を見たことにあります。その子どもたちの目が、それでもまだ子どもの目をしていて、この子どもたちを人間として生きさせるためには、魂の栄養が必要だ、と思いたったのです。レップマンは、アメリカの将校たちの中で、「国際子どもの本展」をする、という思いがけない発想で皆を動かしました。結局、そのことでドイツに世界中の本が集まり、そしてその本が起点となって「国際青少年図書館」がミュンヘンにできることになるのです。

ちょうどレップマンが見ていた戦後の子どもたちが、私たちのジェネレーションです。私たちはもう 60 代になって、でも、この 50 年間で自分たちが振り返ってみても、戦後のドイツだけではなく、もちろん日本も同じ状態でしたが、そういう時代が過ぎて大戦がなくても、世界中の子どもたちは常に同じ弱者としての道を生きているということがわかります。それは精神的なものであるか、物質的なものであるかはわかりませんが、常に彼らはやはり弱者で、生きていくこと自体に生き残りをかけている。そのときを生き続けるために、本というものが、精神的にも肉体的にも果たす大きな役割があると、私たちは信じてこの仕事をして参りました。

レップマンより 50 年近く前の 1913 年に米国の書籍商組合（American Book

Association)の大会でボーイスカウト連盟の主任図書館員のマシューズという人が、「本は単なる商品か」と言って、怒りの声をあげたことがありました。そして、「あなたたちの商売の邪魔をしようとしているのではないが、あなたたちの商品の中に少しはましな本を作ってもらえないか」と訴えたのです。結局、それが非常に大きな運動となり、後のニューベリー賞の始まりになりました。1922年のことです。

このように世界の各地をみても、IBBYの人たちだけでなく、各時代に子どもたちを見て、人間の精神の伝承、精神の実りの伝承を渡していこうとしてきた人がいたと思うのです。その役割を担っているのが、今日来てくださった皆さまのお立場でもあるし、私たちの立場でもあると思います。きっとここにいらっしゃる皆さまは、子どもたちが一人ひとりのかけがえのない、類稀な人生をどう彼らが生きていくか、というのは学校で教えられたり、社会の中で与えられたりすることを超えて、もっと個人的な自分の内面の訓練の中で補強されて何とか生き残っていくということを知っていらっしゃるから、おそらくご自分の経験、または自分の周りにいる子どもたちと生きてきた時間を結びつける本に関わっていらっしゃるのではないかと考えています。

そこで今日は作者の内面的な話をしてくださったエイダン氏から、運営・審査のような外側の枠組みの話をしてくださったマイセン氏とジェイ氏、そこに関わる人たちがすべて情熱を持った個人であったということには変わりはないのですが、それを一つの話題として結びつけるのにはあまりにも広範囲なテーマになりますので、もう少し話題を身近なところに持ってきて、ここに海外から来てくださった皆さまに身近な質問をしたいと思います。

それは一番目に、皆さまが、本の好きな子どもであったか？二番目に、自分のいわゆる内面の成長に大きな影響を及ぼした本を覚えているかどうか。もちろん様々な成長の断面はあると思いますが、今思い出される本について話していただきたい。三番目に、周りにいた大人たちが、その本をあなたの所に持ってくる手立てに何か役割を負っていたかどうか。そういう人が、もしいたとしたら、その人について話していただけないか。ということをお願いいたします。私たち一人ひとりの人生の歩みははかり知れない道程がありますが、それに対して本が果たしうる役割があるのだろうか、ということをお願いいたします。まずマイセン氏からお願いします。全部を含めてお話していただいで結構でございます。

リーナ・マイセン氏:(多代さん、ありがとうございます。)私は物を読んだり、書いたりする環境の中で育ちました。とても恵まれていたと思います。母は、作家であり、翻訳家であり、批評家でもありました。美術雑誌の編集もしていました。父は教師で、宗教と哲学を教えていました。後に父は、IBBY フィンランド支部の設立メンバーの一人になりました。こういう意味では、私は好きになるにせよ、それに逆らって全く違うことをするにせよ、理想的な環境にいたと言えます。私は、何か本以外のことをしようとは一度も思いませんでした。私は常に読書好きで、本に囲まれていました。家にたくさん本があったので、小さいときに図書館に行った事は一度もありません。両親は誕生日の毎に本をプレゼントしてくれました。13歳になるまで、年の分だけ本をもらいましたので、13冊の本をもらいました。そして、私は5人兄弟の一番上でしたので、下の弟たちもプレゼントのおすそわけにあずかりました。

母は暇さえあれば、いつもタイプライターの前に座って何か書いていました。父は机に向かって書き物をしていました。そして私はといえば、本を読んでいました。本当に山ほど本を読みました。何を読んでいたか思い出すと、びっくりするくらいです。でも、私は人に読んでもらう事は嫌いでした。これははっきり覚えています。ある時、父と子ども5人で、一度ラジオ番組に招待されたことがありました。かわいそうに、父はそこで恥ずかしい思いをしました。というのは、子どもたちが番組の中で、「お父さんにお話を読んでもらうのが大好きなんでしょう」と聞かれたのです。私は、当時10歳くらいでしたが、「好きじゃない」と答えてしまいました。私は自分で読むのが本当に好きだったので。

フィンランドで生まれ育ちましたが、そこでは夏休みが三ヶ月ありました。その間は、いつも家の用事から逃れようと、森の中へ行って本を読んでいました。

子ども時代は、第二次世界大戦が大きく影を落とした時代でもありました。私の子ども時代は、牧歌的なものだったとは言いたくはありません。ロシアがフィンランドに宣戦布告をして始まった戦争の最中に、第一子として生まれました。その後、母は戦争中の5年間に4人の子どもを産みました。それで、戦火がひどくなった1944年、まだ私が4歳にもならない頃、両親は私と私のすぐ下の弟をスウェーデンに疎開させました。当時私は4歳で、弟はまだ3歳でした。2人はスウェーデンまで一緒にでしたが、別々の家庭に預けられました。そこに1年いましたが、その間、私

はフィンランド語を完全に忘れ、スウェーデン語を話しました。私にフィンランド語で話しかけてくる人は周りに誰もいませんでした。それでも、子どもですからあつという間に現地の言葉を覚えしました。

そこで、大変なことが起きました。私は扁桃腺の手術をしたのですが、私はフィンランドから疎開してきた小さな子ということで、これまで一回しか手術の経験のない若い医師のところへ行かされました。この医者は私の扁桃腺だけでなく、ほかの部分も切り、声帯も傷つけられてしまいました。それで私はしゃべれなくなってしまったのです。これは大変辛い経験でした。私にとっては、言葉を失ったも同然です。話す能力をなくしてしまったのです。今でも、話をするのに声帯に支障があります。周りの人に「何かしゃべってごらん」と言われたのをよく覚えています。私にはそれは聞こえるのですが、でも何も答える事が出来ませんでした。

こういう体験から、ある本が私にとって、とても大事になりました。そう感じた理由は後になってもっとよくわかったのですが、それは、ハンス・クリスチャン・アンデルセン童話の中にある『人魚姫』です。今はもう正確なストーリーは覚えていませんが、人魚姫が、確か、王子様の命を救うのです。二人は恋に落ち、結婚するのだと思います。確か、人魚姫は自分の正体を明かす事はできませんでした。本当のことを伝えられないということで、私は自分と人魚姫を重ねていました。「ああ、もし私も話さなくてもすむのならいいのになあ」と思いました。これで、何か人生に影響を与えるような本があったかという多代さんのご質問の答えにかえさせていただきます。

島氏：リーナとはとても長く一緒に仕事をしていたのに、そんな小さな時の経験を聞けたのはこのシンポジウムが初めてでとても興味深いことでした。色々な体験をして大きくなるのだけれども、それを皆黙っています。そこに一つの本が介在して彼女を勇気付けた。こういうことは、重大なことだと思います。おそらくリーナのご両親もできなかったことを、この一冊の本がおそらくリーナを慰めたということになると思います。ありがとうございます。

では、次にジェイさん、お願いします。

ジェイ・ヒール氏：私の育った家にも、たくさん本がありましたので、リーナと同様、恵まれていまし

た。私のイギリスでの幼年時代も、第二次世界大戦中でした。子どもの頃は国内をあちこち引っ越しましたが、本の良い点は、引越しの時一緒に持っていけることです。子どもの頃のことを、今教えている子どもたちに話す時、当時はテレビのない時代だったのだと伝えます。子どもたちは、信じてないようですが。私が子どもの頃は、家族が一箇所に集まって腰をおろして、ただおしゃべりを楽しむという時間がありました。今の家庭でもそういう団欒があるのでしょうか。家族それぞれが別々の椅子に座って、銘々が読書を楽しみました。一週間に一回テレビのない夜というのを作ったら、すばらしいでしょうね。

私は本が大好きでしたが、これはごくあたりまえのこと、普通のことだったのです。私の子ども時代には、本は決して特別なものではありませんでした。本と共に大きくなったというだけです。本は友たちでした。そして、私はリーナと違って、人に読んでもらうのも好きでした。怠け者の少年でしたから、誰かが読んでくれる方が楽だったのです。

ある時、私は エニッド・ブライトン(Enid Blyton)というイギリスの作家に出会いました。これまで、エニッド・ブライトンは 500 冊以上の本を書いています。どの作品も読みやすいものばかりです。子どもの冒険物で、ウォルト・デズニーの映画のように、誰も傷つかないし、手に負えない子も登場しません。出てくるのは、いい子、純粋な子ばかりです。私はエニッド・ブライトンに約 2 年はまりました。それでもどうやら、生き延びたようです。

そして次に出会ったのが、アーサー・ランサム(Athur Ransome)です。彼は実在の子どもがキャンプや探検に出かけたり、小さな船で航海に出かけたりして、本当の冒険をする話を書いています。そして、私は突然、悟ったのです、エニッド・ブライトンの話のようなことは決して現実にはありえないのだと。そこで、エニッド・ブライトンを読むのはもうやめて、アーサー・ランサムやもっと良い本を読み始めました。このときが私にとって、第一回目の文学の転換期だったと思います。

多代さんは、自分の子ども時代に影響を与えた大人がいたかどうかお尋ねです。一生懸命考えてみても、そういう人は思いつきません。きっと、私が人の話を聞き入れない少年だったからでしょう。今でも頑固な、年取った少年ですが。(笑)頑固者でしたから、大人から本についてのアドバイスには私は耳を貸さなかったのです。でも、同年代の子どもたちの言う事は聞きました。同じ

事が今でも言えると思います。もし、親が子どもに本を読んで欲しいと願うのであれば、一番してはいけないことは、「これはとってもいい本だから読んでごらん」と言うことです。最良の方法は、その本をテーブルの上において、その場から立ち去ることです。そして、子どもの好奇心を信じましょう。

教師として、私は子どもに本は薦めません。しかし、本を一人の生徒に特別に貸し出します。そうすると、その本が一人の子どもから次の子どもへと、教室の中で又貸しされていくのです。子どもどうしの力を侮ってはいけません。

確かに、J.K.ローリングは近代文学の神様です。ハリー・ポッターはとても人気があります。皆さん、ハリー・ポッターを聞いた事がありますよね。どうしてこんなに人気が出たかという、同年代の読者どうして、これはおもしろいと話題になったからです。本のことが同年代の間で話題になるなんてすてきなことだと思いませんか？ 私にもさしあたり、それはプラスになると思います。

島氏：ジェイ、ありがとうございました。

エイダン・チェンバース氏：私は9歳まで本を読めませんでした。私の父は炭鉱夫で、家には本が5冊しかありませんでした。家を修理するハンドブック、健康ハンドブック、一度も使われなかった小さな辞典、1巻本の百科事典、それからカラーの挿絵のあるイソップ物語。母が、この中からお話を読んでくれたのを覚えています。唯一今でも覚えているのは、『うさぎとかめ』です。他のお話ではなく、この話を覚えているのはどうしてかという、それは、私はかけこぎがとても遅かったので、自分とかめを重ねたからだだと思います。私と同級生のうさぎたちはみんな、心臓発作で他界してしまったか、退職しているか、絶望の中にいます。その中で私はいまだにゆっくりと歩いています。これが、私が最初に思い出したお話です。この本に確かに影響を受けました。

そして、9歳の時、それは私の9歳の誕生日から2ヶ月経った時でしたが、そのときのことはっきりと覚えています。最初から本が読める子どもとして成長してきた人たちは、いつの時点から読めるようになったのか、普通、覚えていません。でも、私はその瞬間を鮮やかに覚えています。サディストだった学校の先生がいて、竹刀で生徒をよく叩いていました。この先生は、毎週金曜

日、本を一冊ずつ家に持ち帰らせました。生徒である私たちは週末にその本を読んで、月曜日には返すことになっていました。返す時に本に何か新しいしみでもついていたら、それは大変で、私たちはひどい目にあいました。ですから、私が金曜の夕方学校から帰ると、母はその本を取り上げて、ドレッサーの上に隠しました。そうすれば、本はちっとも汚れませんから。そして、月曜の朝、私が家を出る直前に、母は本を渡してくれたのです、そしてこう言いました、「本を落としたらだめよ」と。

ある金曜の夜、母が私の後ろでアイロンがけをしていました。当時は1943年ですから、電気アイロンはありませんでした。重たい金属製のアイロンを火で温めてから使います。火にかざしておいて、温まったら取りに来て、それでアイロンがけをします。私は、火のわきにいる母の前で、椅子に腰掛けていました。父は火の反対側にいて、いつもの金曜の夜の過ごし方をしていました。それは、夕飯後にひとねむりをして、9時ぴったりになると起きて、パブに行って、友人とビールを飲むというものでした。私はその日家に持って帰ってきた本を、その晩は何かの理由で、どうしてなのかわかりませんが、見ていました。母はそれをドレッサーの上には置かないでいたのです。どうしてなのかわかりません。そして、私はその本の挿絵を眺めていました。そして、突然、私の頭の中で話し声が聞こえたのです。その声の一つは、お話を読んでいる声でした。互におしゃべりをしている声も聞こえてきました。これには私は大変なショックを受けました。私は変な風になってしまっていたに違いありません。そのショック状態が起きたちょうどそのときに、父が目覚めました。それは9時ぴったりにあったのでしょうか。そして、私の記憶からすると、今リーナ氏が座っているところから父の声が聞こえてきました。そして、私はというと、本を見ているのです。父は母に向かって、「こんな時間まで起きてこの子は、何をしているんだい」と話しかけています。つまり、「なぜまだ寝ていないんだ」ということです。なぜなら、すでに私の就寝時刻を過ぎていましたから。そして、私の後ろで、母がこうしているのが聞こえます。

「おだまり、何馬鹿なことを言っているのさ。あの子が今何をしているかわからないの」つまり、母は私の顔の表情がいつもと違う事を見てわかったに違いありません。

私が7歳の頃から、両親は私が読めないことを心配していました。そして、先生方は、母に私の発音が遅い、と伝えました。もちろん、それは私には驚きでも何でもありません。私はすでにわかっていたから。しかし、先生方が本当に言いたかったのは、私が、頭が悪いということだっ

たのです。どうしてかという、人は字が読めるかどうかと、頭の出来の良し悪しについて関係づけます。もし字が読めなければ、その人は出来が悪いのだと考えます。そこで、大人たちは私を出来の悪い子の行く学校へ入れました。そこでは生徒は本を与えられませんでした。どうしてかという読めないからです。読めないのだから、どんな本でも与える意味はないということです。字も読めないくらい、出来が悪かったのですから。

文字通り 10 歳の誕生日である 1944 年の 12 月 27 日に、私は猩紅熱にかかりました。その当時は猩紅熱にかかると、隔離された病院に 3 週間入院させられました。私もそうでした。そして、3 週間後、退院して自宅にもどると、祖母がプレゼントをくれました。それは、子ども向けの本で、バーバラ・ユーフアン・トッド(Barbara Euphan Todd)という人の書いたワーゼル ガミッジ(Worzel Gummidge)という本でした。それは、口がきける、生きたかかしのお話でした。

私はほんの子どもであり、当時は冬でした。ずっと病院にいて、病院が大嫌いになっていました。それで家に帰ったのがとても嬉しくて、私は火のそばに座って、この本を読み始めたのです。読み始めた理由はただ一つ。私はその本に描かれている女の子の顔が好きだったのですが、その子が膝について座って何かを食べている絵があり、いったい何を食べているのか知れたかったです。その子は、膝の上のにせたボールから何かを大きなスプーンを使って食べていました。それで、その本を読み始めました。そして、まさに、その女の子が食べようとしているところまで来た時、それは、パンとミルクを食べていると書いてあったのです。そこで、私は母に、今、大きなボールにパンとミルクを入れて食べるんだと言いました。パンとミルクをボールに入れて食べるなんて、私は今まで一度も聞いたことがありませんでした。母はすぐに作ってくれて、私はそれを食べました。そして、本の中にはもっと何かあるかもしれないと思い、それで、残りの部分も読んだのです。これが私の自分の力で読んだ最初の本です。そして、その後の 18 ヶ月の間に私は、その本を 13 回読みました。そして、私は何回読んだか数えていました。これは、当面の間、私の本となりました。けれども、他の本は未だに一冊も読みませんでした。

やがて私たち家族は、町へ引っ越しました。そこではじめて図書館というものがあることを知りました。図書館など、これまで一度も聞いたことがありませんでした。どうして図書館を知ったかという、家の通りの向こう側にある男の子が住んでいて、私が引っ越してきたばかりだったので、

友だちになろうと彼がわざわざ私の家まで来てくれたのです。この子は毎週土曜日になるときまって、公立図書館の子どもコーナーへ行くのです。そして、私も同じことをするのだらうと思っていました。私は引っ越したばかりで、友だちもいませんでしたので、図書館がどんなものか知らない、ましてや行った事がないとは言いませんでした。彼は私を連れて行って来て、彼が読みたい本を私が借りることになりました。借りるのは一回につき一人 2 冊と決まっていたのですが、そうすれば、4 冊借りられたからです。彼は私の友だちでしたから、彼は当然、私もその本を読むのだらうと思っていました。ジェイが言ったのと同じ状況で、読めと言われた本を私は読まなくてはなりません。こういう関係は 2 年間続きました。けれども、私が本を読み続けた理由はただ一つ、彼と友だちでいるためでした。

やがて、私が通っていた学校の先生方は、私は結局、頭が悪くはないという結論に達し、今度は、お利口さんの子が行く学校へ行くことになりました。もっとも、私は同年齢の子より、2 年遅れでありましたが、そこで、ジム・オズボーン(Jim Osborn)という先生と会いました。彼は英語科の主任でした。ジムは、私が生涯会った人の中で最も情熱的な人です。人生の中で読むことと書くことが一番大切だと信じている人に出会ったのは、彼がはじめてでした。ジムは教養のある人間になるためには、英文学の名作を読むことが必要だと考えていました。私には未だにその理由がわからないのですが、この先生は私の面倒を見ることを決心され、私を教育するのに必要な事をして下さいました。ジムは私の本当の意味での父です。ジムが、私が先生になる事を決めてくれたのです。本の読み方も教えてくれました。彼は、最高のものだけを読むべきだと終始言っていました。妥協は許されなかったのです。

彼のおかげで、私は 15 歳のとき、D.H.ロレンス(Lawrence Dvaid Henbert)の『息子と恋人』を読みました。自分のことについて書かれた本を読んだのはこれが初めてでしたし、また、私が育ってきた文化に根ざした本としてもこれが初めてでした。今でも、英国の労働者階級について、労働者階級出身者が書いた唯一の名作です。

当時私はベッドで本を読んでいました。この本を読み終えたのは深夜 2 時、3 時でした。もちろん、結末があるのはわかっていました。終わりが近づくとつね、私はどんどん読む速度を落とすいき、終わりがなかなか来ないようにしました。そして、涙を流しながら、最後のページを終えたのです。ここでお話が終るのがとても残念でした。読み終えて、本を閉じたその瞬間に、私自

身が作家であることを知ったのです。それはどういうことかと言いますと「私がこの本を書いていたらよかったのに」と、読み終えながら、自分で自分に言ったのです。そして、その直後に、「なぜ、私が書いてはいけないのだろう」と思いました、そして、次の日から、小説を書き始めました。

そのとき書いた物は今でも持っています。全部で 80 ページになりました。書き終えるには程遠く、それでやめてしまいました。書くのに6ヶ月かかりました。書くのをやめた理由は、小説がいかに長いものであるか、突然にして悟ったからです。これはマラソンを走るようなもので、いきなり始められるものではありませんでした。そのために体を鍛えて訓練しなくてはなりません。私は訓練に 15 年かかりました。

(多代さん、ごめんなさい、話が長くなりました。)ジム・オズボーンがどんな人が知りたければ、*Dance on my grave* 『おれの墓で踊れ』をお読みください。これは日本語訳が出ていて、その中にジムという名の登場人物がいます。彼の名前はそこで出ています。私がお世話になった先生の姿がそこにあります。私実際に知っている実在の人を本に全面的に登場させたのは、これが初めてです。この先生は私がこの作品を書き上げる直前にお亡くなりになりましたので、この本はお読みになりませんでした。

島氏：ありがとうございました。皆さんの読書体験のお話は本当におもしろい。特に今エイダンのおっしゃったオズボーン先生のことは、私も『おれの墓で踊れ』を読んで、この登場人物には、誰かモデルがいるのかと思いました。何か不思議な役割を一人の少年が成長するための大人が誰かの代わりに子どもたちの周りにいるのではないか、と思いました。

ジェイのお話で「親や先生にどんな本を押し付けられるか、とんでもない」というお話がありましたが、実は私もいつも周りの人の薦める本は見向きもしない少女でした。でも、不思議な運命ってやはりあるもので、絶対に読まない、本はいらない、という子どもにも一つの思いがけない状況になり、例えば歩けなくなって周りの大人たちが言っていた本をそっと取り出してきて、その大人たちに見せないようにして読む。そういう反抗的な子どももいるものです。ですから、それぞれの子どものあらゆる存在が、やはり周りの大人たちのあり方によって影響されるということは、あまりにもはっきりしていて、私たちはうっかりしてられないなと思います。

今から 4 年前に、日本の人たちは大変な偶然の結果なのですが、幸運なことがありま

した。それは 1998 年の秋の終わりに、皇后様がテレビジョンで自分の少女時代の読書について語られたのです。これは 50 分ぐらいの番組で、全く広告も入らない NHK の教育番組でしたが、一人の方が 50 分間、体験、それも読書体験、それも少女時代の読書体験をお話し下さる状況がありました。これは、テレビのためになさったことではなく、それは IBBY のニューデリー大会の基調講演で、ニューデリーのために作られたものが日本のテレビジョンが何とかお許しを得て放映したことだと思います。私たちがニューデリーに行ったときに、日本で放映されたのです。

このことは本当にたくさんの日本の人たちに、自分たちの若いときの読書について思い起こさせるきっかけとなりました。そして、これが何か一つの安心感というか、自分たちが生きてきた軌跡の中で、精神的な、内的な価値というものが、ずっと自分の中にあり続けるということをめったにこういう形では皆が確認できなかったことを私たちが体験できた、素晴らしいことだったと思います。それ以来、例えば皇后様が昔お読みになった本、私たちの多くの仲間たちが読んでいたのですが、その本が再販され、そしてその昔の本たちにもう一度目がいく。例えば日本には、たくさんの翻訳があります。それがあらゆる外国語からの翻訳を、実に豊かに極東の島の子どもたちは手元に持っていたという、その状況のありがたさというのは、私たちの上の世代に、やはり素晴らしい人たちがいたのだなあ、と思わずにはいられません。

ジェイ・ヒール氏：何か自分にとって影響を与えた大人がいるかどうかと多代さんは尋ねられました。エイダンが話している間、思い出しました。子どもの頃の出会いはないのですが、私が教師になりたての頃です。その学校の、国語教科(注:この場合は英語)の主任の先生が、私に「ジェイ、英語の教師として一番大事なことは、子どもに本を読ませるようにすることだ。それさえできれば、教師の役目は半分果たしたも同然だよ。」と、おっしゃいました。そこで、私はまず、子どもに薦めるにはどんな本がいいか探す事にしました。そのため、学校の図書館にある本を読み始めました。それから 35 年経ち、IBBY と出会いました。なぜか私の人生は、ずっと以前から IBBY に会うようになっていたのでしょう。

ここにいる私たちも、またお聞き下さっている皆様も、最初は子どもが本を読めるようにすることが大切だと認識しています。その瞬間は、おそらくエイダンが言ったような衝撃を伴うのでしょう。

そして、次の段階は、ひとたび読めるようになったら、今度は、子どもたちが読むことの楽しさをわかるようにすることです。そのためにこそ、今日の集いはあるのだと思います。

島氏：今、ジェイのおっしゃったことと、読書ということと、私自身の体験で本というものがちょっと不思議なダイメンションを持つような気がするので、ちょっとお話ししたいと思います。

私はいつでも、何というか文章を飛ばして読んでいます。そしてその文章が情景を描いている、言葉では表現し難いのですが、根底に自分の好きなものがあると、それだけつまみ出す。例えば、私はまだあまり本を読まないときに、ジョルジュ・サンドの『愛の妖精』を読みました。私は「妖精物語」という題かと思っておりましたが、先ほど調べましたら、違ってました。その中に悪い妖精が出てくるのですね。その妖精の話を読んでいたときに、「ああ、この悪い妖精、私と同じだ」と思ったのです。全部その悪い部分が自分に似ている。だから自分は悪い子なのだ、とそういう風に思いました。そして、私はいつでもブラック・シープでしたから、悪いことがいつでも自分のアイデンティティーようになっていた。

ところが、ひどい病気をした後に、一人で密かに本を読んでいるときに、突然、父の愛読書であった『カラマーゾフの兄弟』を読んだ。これもまた全部飛ばして読んでいますね。飛ばしながら自分の好きなシーンを求めている。そこでゾシマという大変高い位の僧侶が伝導で観衆に向かって告白をしている。非常に高い精神的な地位にある人が、自分の若い頃、従僕だった若い男を自分の感情ゆえに叩きのめしている。そういうゾシマの情景で、今度は悪い妖精と同じだと思っていた自分がものすごく慰められる。文学作品をしっかりと読んでいるわけじゃないのに、その中の情景に自分を置いて、そして自分のその時感じている苦しみを癒す。そういうことがもう、12歳ぐらいの少女にはできる、ということ。それは、読書力があるということと、全然違うのだらうと思います。それが文学というものが私たちに与えるものすごく力だと思って、そういう意味で文学って本当に不思議な、何なのだろうなと思います。私たちが、本というのは文学ということで、おそらくエイダン氏のおっしゃった、あらゆるたくさん書かれたものの中で、文学となるものの運命っていうのは、おそらく何十年もかかって一人の役割をもった人によって皆に手渡されていると、そういう話を今日は皆さまから伺えたような気がしま

す。

私たちはここに、本を子どもたちのそばに渡していく役割を持って集まって参りましたが、これを本の鎖という言葉で呼んだ人がいるのですね。本の鎖につながれた、というとか囚人みたいですが、そうではなくて、本のチェーンを持っていると。そして何かそういう本の鎖というのは文化、宗教、言語、環境、もしくは政治的なことすらも超えて、共通の内面的な基盤をみんなに与える。そういうことを人類のはじめから私たちは持ち続けてきて、どんな社会においても、その本によって記録された人間の文学という領域は、生きていく上で重大な役割を持っているのだらうと思います。

マイセン氏。何かさっきおっしゃった本のほかに、いくつかあげてらした本のタイトルがあったようですが、どうぞ。

リーナ・マイセン氏：私は絵本の役割について考えていました。絵本は早くから読み始めた方がいいと言われてます。もちろん、読み聞かせも大事です。私は人に本を読んでもらうのは嫌いでしたが、絵本が嫌いだったわけではありません。現在、私は祖母として、孫たちに本を読むことで、すばらしい体験をさせてもらっています。これはまさに異世代間の対話です。多代さんがおっしゃってましたように、本こそ人と人をつなぐ鎖です。鎖の役割をするのは様々なものがありますが、本こそ、世代を超えて人々を結びつけます。物理的に結びつけるというだけでなく、他の形ではなし得ない何かを人に伝える役目も果たします。つまり、本によって、文化を伝えているのです。そして私たちがこの国際的なシンポジウムに出席しているのは、国際的に文化を共有する者の代弁者としてここに来ている、そういう意味があるのだと思います。

子どもが小さいときから本を与える事がとても大切です。そうする役目は、もちろん、両親、祖父母、学校の先生など、どなたであれ、本を選ぶ人にあります。しかし、子どもに本を与えっぱなしではいけません。そうでしょう、子どもたちに本の中に引き込むように手助けが必要です。しかし、これは、手助けをする側にとってもありがたい機会なのです。私たちは年をとっていくと同時に、自分の子ども時代にもう一度戻れるからです。そういう意味では祖父母の役割は非常に大切だと思います。

島氏：ありがとうございます。富田さん、何かお話はありませんか。

富田館長：読書について、大変感動的なお話を色々伺えて、ありがとうございました。ちょっと観点を変えまして、別のことを伺いたいと思います。先ほど、エイダンの話の中に、「声」ということが出てきました。声が非常に色々意味を持っている。それから、リーナ・マイセンさんの声を失った経験というもお話いただきました。チェンバースの最新の本の中で、主人公がおばあさんの物語に出会って、自分自身の大切なものを発見していく、というのがありましたけれども、今伺ってみたいと思うことは、その語ることの大切さについてです。ジェイ・ヒールさんもストーリーテラーとしても非常に有名でいらっしゃるので、自分の物語であれ、昔話であれ、私たち自身の声をもって子どもたちに語ることが今大切なんじゃないかという気がするのですが。そのようなことで何かお話が伺いたいと思います。いかがでしょうか。

エイダン・チェンバース氏：次の二つは全く違った事です。特に教員養成や司書養成の場では、読み聞かせと自分で読むこととはだいたい同じことだと、しばしば指摘されます。確かに両方とも大事です。人間とは言葉をもった動物であり、ストーリーを語る動物です。そしてすべては音から始まります。ですから、言語とは、意味をもった一種の音楽です。人間が読み書きができるようになる以前の時代が、実は人類の歴史の中で非常に長く、読み書きができるようになったのは、歴史の本当に最後の方、つい最近の出来事です。これは教育が何であるかを示唆しています。教育の基礎はストーリーであったにちがいません。お話を語ることが、教育のおおもとであります。しかし、今の私たちの時代は、読み書き文化の時代です。

お話を口頭で伝えたり、耳で聴くということと、お話を書いたり読んだりすること、この二つには明確な違いがあります。お話を語るときには、話し手が、直接、聞き手に伝えます。話し手は、語る内容を目の前にいる聴衆に合わせることができ、その反応に応じて、調整もするでしょう。そして、お話が終れば、それで終わりです。再現はありません。そういう意味では劇場に似ています。芝居を観た記憶の中にお話が残りますが、それ以外記録はどこにもありません。それは、私が「うさぎとかめ」を記憶しているのと同じです。私の母が話してくれたという、一つの経験としての記憶だけです。

読んだり書いたりすることは、これとは全く違います。書かれた物は動かさせません。ひとたび書き記されたもの、それはある形をもった物体の中に存在し続けます。そしてそれは変えられないのだということもわかっています。その中の言葉を変えることはできません。ページを破くことも、ページの順番の変更もできません。ある一節が気に入らなくても、書き直しはできません。そして、書かれた物は何度でも読み返すことができますが、読み返すたびに、違った感想を持つのです。読む文章は毎回同じなのに、この本という物体こそ、民主的な社会の特徴です。コミュニケーションの形としてこれほど民主的なものはありません。

読み聞かせの場合は、その話を聴く人数は限られます。そして、その話を聞くという経験はその場限りです。現在、私は活字になっているシェイクスピアの作品を読むことができます。これは400年前に書かれた作品の中の言葉が変えられることはありません。そして、作品を劇場で上演するたびに、再び、作品は新しくなるのです。芝居は400歳の年老いたものではなく、今現在のものとして通用します。同じ事が、皆さんが読書している最中に皆さんの頭の中で起きます。頭の中が劇場のようなもので、本の中に書かれている文章を演ずるのです。そして、言語が活字となって印刷されると、話す言葉にはない特別な特性を持ちます。ここでは、それ以上お話すると複雑すぎますので、ここまでにします。

脳の専門家は、読むことは、人間の精神の行う最も複雑な人間の活動と言っています。読むことは難しいことなのだということを私たちは覚えておく必要があります。読むことは大変な作業なのです。ここにいる私の友人は、人に朗読してもらうのが好きだったと言いました。どうしてかという、本を読むよりもたやすかったからだとおっしゃいました。その人は今や立派な大人で、なおかつ教育を受けた人です。耳で聴くよりも読むことの方がはるかに大事であるとわかっている方です。人生において、読むことは大変大事です。読むことは毎日しなくてはなりませんし、自分で認識している限界を超えるには、助けが必要です。

そこで、教師とは何をすべきかと問われれば、子ども一人では行けないところへ行けるように手助けをするということでしょう。しかも、子ども一人で行ける速さよりももっと速く到達できるように手助けすることでしょう。生徒がすでに気に入っているとわかっているものを教師が与えるのであ

れば、教師の役割は何になるでしょう。生徒が既に自分の好みを把握しているのであれば、それを生徒に与える事で教師としてはどんな意味があるのでしょうか。生徒は自分で何が好きかをもうわかっているのです。教師の務めとは、生徒がまだ行った事のない未知の世界へ導くことです。そして、それができる唯一の方法は、多くの種類の本をたくさん教室に置いておく事です。教師自身が自分で事前に読んでどんな本か知っていきなくてはなりません。また、生徒の事もよく把握し、どんな本を教室の机の上においておけばいいか、子どもが選ぶ本は何かわかってなくてはなりません。

これは高い技術を要します。教員養成の最中にこの技術の教育を受けさせるべきです。しかし、大概の国ではこのようなことはなされていません。教室には少なくとも500冊の本を置いておく必要があるでしょう。しかし、実際そんな教室はまずありません。先生は、読み聞かせをしたり、朗読したりするだけでなく、教室にある本についても知ってなくてはなりません。しかし実際そうできる先生はほとんどいませんし、実施もされていません。子どもたちが自分で読む時間も設ける必要があります。一斉に教室で読みますが、静かに読むようにしないとダメです。10歳の年齢なら、毎日だいたい30分が必要でしょう。これもほとんどの現場では実施されていません。その結果として、私たちは、中途半端な文学的教養しか身につかないのです。

西洋の文明化された国の中で、こういうことを学校に要求している政府は一つもありません。この現状が正されない限り、教養ある市民を育てるということについて論じても、何の意味もありません。国民に教養があるかどうかは、ごく一般の市民が高いレベルをもった読者であり作家であるかどうかにかかっています。そして、この一般の人たちが、読みたいと思った本をすぐに手に入れられるかどうかによります。つまり、どんな街にも、図書館があり、どんな学校でも中心には図書館があるという状況が必要です。地域社会がこのようにならない限り、文学的教養のある国民など育つわけがありません。

島氏：本当に今の話は、日本中の先生たち、日本中の文部科学省のお役人に聞いて欲しい。本当に必要ですよ。これは、どこの西洋の社会でもなされてない、ということですが、もし極東の日本でこういう社会が作れたらどんなに素晴らしいかと、今考えました。絶対にできないと思わないで、私たちはずっと考え続けていければ素晴らしいことが起こ

るかも知れません。

本当に今日はたくさんのいいお話をさせていただきました。おそらく皆さんもここにきてくださった意味を感じてくださったか、と思います。それは講演者皆さんの輝かしい業績とともに、やはり一人の人間として育ってきた、大変我々と身近な状況、それもそれぞれに違った形の生い立ちを私たちに教えてくださって、そして私たちももう一度自分のことを振り返ってみるチャンスを与えていただけたのだと思います。

ジェイ、今のことで先生として何かおっしゃることがありますか。

ジェイ・ヒール氏：止められなければ、エイダンも私も永遠に話し続けていると思います。エイダンは、読み聞かせについて話されました。ご参考までに紹介しますが、私の住んでいるアフリカでは、読み聞かせは何百年という長い歴史があり、書き記すことが行われるようになるずっと前から、読み聞かせが行われてきました。文字の前には絵がその役割を果たしていたのでしょう。いずれにせよ、読み聞かせはアフリカ社会での教育の原型でした。読み聞かせは子ども向けではなく、住人全員を対象にしていました。住んでいる社会の歴史を伝えたり、人々と仲良く暮らすのにはどうしたらよいかという決まりごとを伝えたりしていました。そして娯楽性のあるものもありました。

現在ではこれは、口頭伝承とよく言われます。そして、今でもアフリカでは活字として印刷された物は信用せず、口頭伝承を重要視している人たちがいます。エイダンが指摘したように、活字としてひとたび印刷されると、それは変更できないからです。しかしもし、誰かが間違っていていたらどうなるでしょうか。口頭伝承は随時修正ができます。ストーリーは生きものです。悲しいのは、家族で大切に口頭伝承を守っていくための時間を、テレビやビデオが殺してしまっているということです。このことについて何らかの解決策を提案するつもりはありません。ただ、これはアフリカの抱える問題の一つとだけお伝えしておきます。そして、この点につきましては来年9月にアフリカのケープタウンで開催予定のIBBY会議で扱う予定です。

島氏：アフリカだけの問題ではないと思います。日本で全く同じことが起こって、それに加えてあらゆる種類のゲーム、映像の中で子どもたちの時間が本当に殺されていく。時間を、30分取ることもできなくなっているということは、子どもたちの本に向けられる意図がなくなっているのですよね。瞬間的な反応の中に子どもたちがさらされてい

る。そういうものを供給する社会に対して、何の歯止めもない。これは、社会の基本的なコンセンサスが利潤の追求にばかり力を入れているからではないでしょうか。もしそうだとしたら、我々が人間でいる意味はどこにあるのかな、という疑問を持ちながら、今、私たちは生きているような気がします。

それでは、そろそろ時間です。

富田館長：今日は長時間にわたって、大変内容の濃い話をありがとうございました。今日は、特に後半、「読むこと」「読書」が人生にもたらす影響について話されましたけれども、ちょっとここで、一つ思い出したエピソードをご紹介しますと思います。

これは昨年のパーゼル大会の最終日、閉会のレセプションの席で、ストリートチルドレンの少年たちがブレイクダンス、本当に逆さになってくるくる回ったりするすごいダンスを披露してくださいました。それまで読書のことですか、本のことですか、IBBYの役割とかという色々な議論をしていたのが、皆吹っ飛ばす感じで、圧倒的な感動で会場を包んだのですね。私自身もすごく感動しながら、でもそれまでの議論とこのダンスが用意されたということとの落差を埋められないでいました。

日本に帰った後、そのIBBYの報告会の席上で島さんがそのことに触れられて、「あの時にあの会場にいた人は誰も、今、彼らには本は必要がない、って思ったわよね」とおっしゃったのです。本の活動をしている会長の島さんがそのようにおっしゃった、その言葉に私は大変感動いたしました。皮肉な意味じゃなくて、感動したのです。それは今日、今第二部のところでお話が出ましたが、読書は大変素晴らしいものですが、これは義務ではないですね。本当に喜びを持って、その子どもたちが歩んでいく人生の中で必要なときに出会うものだと思います。

今の現代、子どもたちが置かれている状況というのは、彼らが抱えている問題も含めて実に多様です。それから、世界の情勢も日々、ニュースを見るまでもなく、大変悲惨な状況が続いております。そしてそのような中で、一人一人の子どもたちは実に色々な人生の時期を経ていくわけです。ここに今日集まった私たち、図書館員や色々な方がいらっしゃると思いますけれど、子どもと本との良い出会いを手助けするために、本当に幅広い国際的な連携を持ってこれからも活動を続けていきたいと考えております。そのための旗印、これが戦後の瓦礫の中の子どもたちの目に感動して、そして子どもたちからまず始めようというイェラ・レップマンの情熱で始まった、この国際アンデルセン

賞ではないでしょうか。このことを、皆さんで確認して、今日のシンポジウムを終わりたいと思います。ここで、島先生、講師の方々に盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)